

# 待降節默想：12月22日

默想のテーマ：「マリアの感謝」「神は私たちの願望を助けてくださる」「感謝から寛大さへ」

マリアの感謝

神は私たちの願望を助けてくださる

感謝から寛大さへ

マリアは、エリザベトとザカリアが住んでいるところへ、急いで歩きま

した。到着すると、天使が告げたことがすべて真実であることがわかります。彼女は固く信じていましたが、いとこに子供が生まれれるのを目の当たりにし、喜びでいっぱいになりました。メシアの現存という彼女がすでに感じていることが再確認されます。彼女の溢れんばかりの喜びは、ヨハネにも伝わっています。母の胎内にいる洗礼者が、良い知らせを告げ知らせる時を心待ちにしている姿を、想像することができます。ヨハネは、今この瞬間、彼の声を聞くことができる唯一の人である母親に、熱心にそのことを告げます。

マリアもまた、自分の心を満たした大きな喜びを分かち合いたいと、切望していました。エリザベトに挨拶したとき、彼女は従姉妹がすでにすべてを知っていることに、すぐに気づきました。これまで、知らせを、心の奥底に秘めていました。イエスの母は歌い出し、賛美の中でイスラ

エルの歴史を、彼女が聖書の中で何度も読んできた言葉と結びつけます。彼女に対する神の愛は、あまりにも大きく、それをどう表現したらよいのかわかりません。教会の典礼の中で私たちもしばしばそうするように、聖母は神ご自身から言葉を借りなければならぬのです。マリアはエリザベトの賛美の言葉を、多くの驚くべき行いの創造者である神に、すぐに向けさせます。彼女の全生涯は、この目標に向けられるでしょう。人々を神のもとに導くことです。

「私の魂は主をあがめ、私の靈は救い主である神を喜びたたえます」（ルカ1・46-47）。マリアは神がどのように行動され、どのように彼女を用いられるかに圧倒されます。

「身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです」（ルカ1・48）。マリアは神の特別な好意のまなざしを感じ取り、この確

信が彼女に感謝をささげるように導きます。

---

マリアは、創造主の目にこれほど自分が好意的に映るとは、夢にも思いませんでした。彼女は、神がその計り知れない善意において、神の自由そのもの以外の理由はなく、その賜物を彼女に注いでおられることを悟ります。私たちは驚きを隠せません。神が、私たち貧しい被造物を、これほど愛しておられることを想像することは難しいことです。

しかし、罪の経験のせいで、私たちは、この感謝からやや距離を感じことがあります。なぜなら「神を知覚する能力」という賜物は、ある人たちからは差し控えられるかのように思われることを忘れてはならないからです。そして実際、私たちの考え方や行動様式、今日の世界のメンタ

リティ、私たちの経験全体が、神に対する受容力を鈍らせ、神に対して〈音痴〉にする傾向があります」<sup>[1]</sup>。私たちは、この困難に心を乱されではありません。聖トマス・アクィナスが私たちを安心させてくれるよう、「神の私たちに対する恵みと愛は驚くべきものであり、私たちが把握できる以上のことをしてくださいます」<sup>[2]</sup>。つまり、神に対する私たちの受容力は弱まるかもしれませんのが、神の恵みはそれをはるかに超えて私たちを助けに来てくださるのです。

神は、ご自分の娘や息子たち一人ひとりに、その愛の熱烈さをもって手を差し伸べられます。「神は、私たちが善良になるまで待たずに、私たちを愛し、私たちにご自分を無償でお与えになりました。そして聖性とは、この無償の贈り物を守ることにほかなりません」<sup>[3]</sup>。聖なる者は、このように神に愛されることで

あり、神が熱心にそれを望んでおられるからです。それ以外の理由はありません。聖ホセマリアはかつて、私たちを驚かせるような言葉を用いてこう言いました。「信仰と愛によって、私たちは神を狂わせることができます。彼は十字架の上で狂い、聖なる聖体の中で毎日狂い、父が長子にするように私たちを甘やかすのです」<sup>[4]</sup>。私たちも、神の無償の視線の対象です。マリアは、自分の喜びがすべての世代に述べ伝えられることを悟り、この感謝が自己奉獻を生むのです。

---

感謝の心は、寛大な対応への欲求を容易に生じさせます。心を感謝で反応させてこそ、私たちは真の幸福を得ることができます。愛に愛を返すことに全力を尽くすことができます。私たちは、神から与えられたものに比

例するものを神にお返しすることはできません。しかし、この無力さはある意味で私たちを解放してくれます。私たちの自己奉獻そのものが、

「私に偉大なことをなさった」方の働きなのです（ルカ1・49）というのも、主は全能であり、私たちを超えるものを私たちから引き出すことができるからです。「その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます」（ルカ1・50）。アブラハムから今日に至るまで、ごく平凡で、多くの人々から隠されている私たち自身の人生に至るまで。

神はご自身の腕の強さを示すことを好まれ、それによって自分の力や意志の力だけで幸せになれると考える人々を惑わされます。神はへりくだった者、自分を偉大な存在にすることを許す小さな者たちを、ご自分の王国で最も高い場所に置くように定められました。人間の手で築かれた王座など、神は無に帰されます。

神は、自分が困窮していることを自覚する人々を良いもので満たしたいと願っておられます。その第一は神の無条件で無限の愛です。神は私たちの想像を凌駕し、私たちの最も楽観的な願望を凌駕することを決意されているのです。

しかし悲しいことに、神は、豊かでなくとも豊かだと感じる人々を、その宝で満たすことはできません。そして、このことが神の大きな悲しみを引き起こすのです。なぜなら、神は、すべての子どもたちをその愛で満たしたいと願っておられるからです。しかし、それは神の憐れみの物語であり、一人ひとりに対する神の優しい愛情の物語です。それは、世代から世代へと、私たちにすべての喜びを与え、私たち自身が愛される方法を求める神の自由の物語なのです。マリアは〈fiat なれかし〉で、他の誰にも真似できないことを成し遂げました。彼女は大喜びで私

たちに道を教え、共に歩んでくださることでしょう。

---

[1] ベネディクト十六世、説教、  
2009年12月24日。

[2] 聖トマス・アキニナス『信条について』1. c., 61。

[3] フランシスコ、説教、2019年12月24日。

[4] 聖ホセマリア、指針、1934年3月19日、39。

---